富士山

目次

項目	頁
富士山	3
箱根	10
鎌倉	17
横浜	34
日光	
Ⅰ.聖地日光	43
Ⅱ.東照大権現は日本を守る神	47
Ⅲ.日光東照宮	50
Ⅳ.日光の名所	54

富士山は日本人が誇る精神的支え、荘厳な自然である。その円錐形の形が世界でも例を見ない美しい形の独立峰で、3776mの高さが日本一だからだけではない。古代から霊峰とされ、「山頂には富士山の心霊である浅間大神が鎮座する」と信じられていた。人々は活火山である富士山の噴火を恐れ、鎮静するために浅間神社が祭祀され、祈った。私たちの多くは今でも、時々現れる富士山を遠くから仰ぎ見て、「今日は富士山が顔を出してくれたから、きっと何かいいことがある」と言い、一日の無事を祈る。

「富士山」の名前は、最も古い表記は「福慈岳」（常陸国風土記）と伝えられるが、この他に不二山、二つとない山、また不尽山、尽きることのない山、といった表記も古文献で見ることが出来る。

多くの画家は人生の最後には富士山を描きたい、と富士山の見えるところに移り住んでまでして描く。現存する最古のものとしては 1069 年のもので、黒駒に乗った聖徳太子が富士を駆け上がる姿を描いたものが「聖徳太子絵伝」にある。その後、13 世紀になると山頂が三峰に分かれた三峰型富士の描写法が確立される。17 世紀に入り、浮世絵が発達してくると、題材として盛んに描かれる。葛飾北斎の晩年の作「富嶽三十六景」（1831 年）が特に有名だ。歌川広重もその少し後に「富士三十六景」（1850 年代）を発表している。第二次世界大戦後の大作としては、戦中の「国家の象徴」から解放された「日本のシンボル」として日本画家の横山大観が描いている。現在は日本画の題材だけでなく、切手のデザインや後述の紙幣のデザインとしても活用されている。

勿論、絵画だけでなく文学、特に和歌の題材として多くの歌が詠まれている。古くは万葉集に「田子の浦ゆうち出でてみれば真白にぞ、富士の高嶺に雪は降りける」（山部赤人）と謳われ、長歌の中には「燃える火を雪で消し、降る雪を火で消しつ」（高橋虫麻呂）と火山活動を謳ったものも見られる。

80mになる)が存在する。半径 30m という急な曲線も存在する。これは建設に際し、自然の景観を極力損なわないことが条件であったことや、温泉脈に悪影響を及ぼすためにトンネル掘削が出来なかったことによる。日本の他の普通鉄道において、こうした勾配、曲線は例を見ない。山岳鉄道の特徴ともいえるスイッチバックは 3 か所。1991 年に年間輸送人員が 1,000 万人を超え、それまでの 2 両編成から 3 両編成なる。最高速度は登り勾配で 40 km/時、下り勾配では勾配に応じて 30%で 55 km/時、80%で 25 km/時、半径 25m の曲線では 15 km/時である。

◆箱根登山ケーブルカー

1921 年創設、総延長 1.2 km、軌間 983 mm、運行速度は 3.2m/秒、最高標高地は 761m、高低差は 214m。単線 2 編成交走式で 2 両編成、強羅駅から早雲山駅まで 6 駅をつなぐ。

◆ロープウェイ

1959 年設立、延長約 4 km(日本一)、早雲山から桃源台を結ぶ。2007 年に架け替え工事を行い、ゴンドラはスイスから 50 台を輸入する。複式単線自動循環式である。ゴンドラー台の定員は 18 人で、1 時間に 1,440 人の輸送が可能となり、48%輸送力は増加。強風にも強くなり、運行基準の風速も 20m/秒から 30 m/秒に引き上げられる。年間約 250 万人が利用する。

◆恩賜箱根公園

1886 年に芦ノ湖畔の半島「塔ヶ島」に、皇族の避暑地と外国の来賓のために造営された箱根離宮とその庭園が前身。西洋館と日本館の 2 棟がたてられていたが、1923 年の関東大震災、1930 年の北伊豆地震の影響で建築の大半を失う。その後再建はされず、第二次大戦後 1946 年に神奈川県に下賜。その翌年から公園として一般公開される。中央広場には離宮は現存していないものの、離宮を模した「湖畔展望館」があり、当時の歴史を知ることができる。

鎌倉

鎌倉は東京の南西約 45 kmに位置し、太平洋(相模湾)に面している。東西と北の三方を山に囲まれ、南が海に開いている「天然の要塞」であり、武将の源頼朝は 12 世紀末、(河内=かわち)源氏のライバルの平氏を滅ぼした末に、それまで天皇・貴族が政治を行ってきた京都から離れ、5 代前の頼義から始まって父親の義朝など先祖代々が暮らしていた鎌倉に武家政権(幕府)を開いた。鎌倉はさらに、鎌倉時代の新仏教の発祥の地でもあり、面積 39.53 km²の市内に約 110 の寺と約 50 の神社を擁している古都だが、今や東京駅から電車で 1 時間弱と都心から手軽にアクセスできる風光明媚な観光地、海水浴・マリンスポーツの名所として人気があり、人口約 17 万人(2015 年 7 月)のこの都市に国内外から年間 2000 万人を超える観光客(2014 年は約 2196 万人)が押し寄せている。

鎌倉幕府は元寇(コラム参照)の影響で衰退し、幕府に不満を持つ武家勢力の攻撃も受けて 1333 年に滅亡。鎌倉はその後、農漁業中心の寒村に戻ったが、江戸時代には江の島と共に江戸庶民の物見遊山の地として再び知られるようになった。背景には、水戸藩主の水戸光圀編纂の「新編鎌倉志」や、文人の中川喜雲著の「鎌倉物語」など鎌倉を訪れた文化人の紀行文の影響があった。明治時代には識者らが「鎌倉は保養地として最適である」(ドイツ人医学者ベルツ)、「海水浴場として理想的な海である」(蘭医の長与専斎=ながよせんさい)と紹介した。横須賀線の開通で保養地、別荘地としてさらに発展。これに伴い大佛次郎や川端康成など多数の文学者が居住・訪問するようになり、鎌倉を舞台に数々の文学作品や映画などが生まれた。

寺院は鎌倉時代からそのまま残るものは少ないが、谷間がひだのように入り組む平野部周辺の丘陵部の「谷戸(やと)」、柔らかい岩質(「鎌倉石」)で構成されているのを生かしてつくられた「やぐら」(岩崖を掘削した墳墓)や「切通し」(山や丘陵部を切り開き、道路やトンネル状にして通行できるようにした道)といった鎌倉独特の地形や歴史的遺構を

日光

1. 聖地日光

日光は栃木県の地区で東京から北、150 kmの距離にある。日光では自然美と人の手が造り出した美の非凡で、心を揺さぶる調和が秀逸だ。ここには徳川幕府初代将軍家康の廟を初め、1999年にユネスコの世界文化遺産に登録された(仏教と神道の)社寺群がある。歴史遺跡ばかりでなく、自然保護林、標高の高い山岳湖、壮大な滝、治癒効果のある温泉など、この地の自然もまた旅行者を魅了する。「日光を見ずして結構と言うなかれ」という日本のことわざが広く知られている。

Nikko を漢字で書くと「日の光」となるが、この地の元々の名称は別の意味だったことを誰もが知っているわけではない。古代、この地は「観音菩薩の住むところ」、二荒(ふたら)山¹と呼ばれていた。二荒という漢字は仏教の観音菩薩の居所、サンスクリット語で Potalaka 山を音声的になぞったもの。正確に言うならば、二荒山と呼ばれていたのは昔からこの地の人々に神聖なものとして崇められていた男体山だ。この地に仏教僧がしばしば来るようになって、山は菩薩の居所と見なされるようになった。8世紀よりこの地に存在した信仰対象全体を意味する「二荒山」という名称(山号)は「にこうざん」と別の読み方もできたが、鎌倉時代(12~14世紀)には「にこう」の読みを「日光」の漢字で表記するようになった²。このように本来は宗教と関係のない「にっこう」という名称はこの地区の元々の宗教的な意義を私たちに想起させる響きを含んでいる。日光は日本人にとって、神が住む神聖な雲上の地だった(たとえば中禅寺湖は標高1269mにあることを思い出して欲しい)。他方で、隣

¹ 山(さん、ざん)という漢字は山そのもの、または山を含めた寺院全体を意味する。

² この名称に最初に「日光」の漢字をあてたのは、820年にこの地を訪れた真言宗の開祖空海(諡号は弘法大師)だという言い伝えもある。

り合う宇都宮という市の名称にはかつて「低地の、現世の」という意味のうつつ(現)という漢字が用いられていた。だからこの地名は全体として「麓の町」とか、「現世の地で」という意味を持っていた。

さて、男体山は菩薩の居所となる以前から地元の人々に神として崇められていた。この山の神は大己貴命(おおなむちのみこと)と呼ばれた。この山以外に、さらに隣の2つの山が神とされた。女峰山は田心姫命(たごりひめのみこと)、太郎山は味耜高彦根命(あじすきたかひこねのみこと)という神だった。神聖な山に隣接する土地も特別なものとして崇拝された。今でも男体山を寺院内宮(つまり神の居所)、中禅寺湖畔を中宮祠と同一視する慣習が残っており、日光市自体は巨大な拝殿と考えられている。この自然の「寺院」と、同時に神道・仏教³の信仰対象全体を合わせた総敷地面積は3400ヘクタールとなる。

これらの土地の開祖は仏教僧勝道上人(735-817)と考えられている。勝道は15年の困窮と苦難を経て782年に男体山に登り、その頂上に二荒神宮寺(現中禅寺)を開いた。この寺は勝道上人が登山の際に発見した山岳湖の名称の由来となった。上人は日光の歴史で大変重要な人物で、三仏堂の近くにこの人の銅像が建立されている。下野の国(栃木県)出身で、27才の時、鑑真和尚の高弟、如宝僧都から僧侶の資格を受けた。まさに勝道上人こそが、古代中国の仏典に照らして気のエネルギー循環のために極めて重要な山々、河川、平地部の相互位置関係に注目し、男体山を菩薩の山、Potalaka山と同じと判断して、それを補陀洛(ふだらく)と名付け、この地が特別の地位にあることを説いたのだ。平安時代の隠遁僧たちが唱えた自己を捨て、厳しい精神修行を行う仏教思想は僧たちに神と交わるのに必要な清廉さを付与したため、僧は人と山の神々との間を取り持つ一種の仲介者となった。こうして勝道上人の時代から二荒山は山岳信仰と仏教が習合してできた信仰の中心となった。

³ 人為的な、そして日光の多くの寺社に激痛をもたらした仏教寺院と神道寺院への区分は明治時代、つまり19世紀末になって初めて起こった。この時以前にこれらの寺社はすでに幾百年もの歴史を刻んでいた。